

文学分野

文学と言語を通してみたグローバル化の歴史 (GLOMUS)

メンバー

- 中務哲郎（京都大学大学院文学研究科教授・リーダー）
高橋宏幸（京都大学大学院文学研究科助教授）
齊藤泰弘（京都大学大学院文学研究科教授）
天野 恵（京都大学大学院文学研究科助教授）
田口紀子（京都大学大学院文学研究科教授）
増田 真（京都大学大学院文学研究科助教授）
西村雅樹（京都大学大学院文学研究科教授）
松村朋彦（京都大学大学院文学研究科助教授）
川上 穰（非常勤講師・京都大学大学院COE研究員・研究会補佐員）
マーチン・チェシュコ（京都大学大学院文学研究科博士課程）
佐々木茂人（非常勤講師）
川島 隆（京都大学大学院文学研究科博士課程）
E.M.クレイク（京都大学大学院文学研究科元教授）
小川正廣（名古屋大学文学研究科教授）
丹下和彦（大阪市立大学教授）
エンゲルベルト・ヨリッセン（京都大学大学院人間・環境学研究科助教授）

研究会の趣旨

近年グローバル化という言葉が頻繁に使われるようになったが、情報が瞬時に世界中に行き渡り、共通の基盤に立って考え行動できるとしてこれを歓迎する人々がいる一方で、グローバル化とは固有の文化を圧殺するもので、名前を変えた植民地主義だとする立場もある。いずれにせよ、このような現象は昨今に始まるものではなく古代から存在したので、その正確な理解なくしては今日のグローバル化の実体を把握すること

も、それを正しく導くこともできないであろう。世界を一つにしようとする志向が働くとき、政治・経済・社会の一大変動が引き起こされるが、本研究会ではテーマを絞って、言語がどのように変質し、精神活動がどのような新たな展開を遂げ、どのような文学・芸術が生み出されるかを考察する。

活動状況

第1回研究会 2002.11.14 12時より13時

出席者 中務哲郎、高橋宏幸、増田真、西村雅樹、松村朋彦、川上穰。

話 題 研究会発足に当たり事務連絡。第2回研究会の打ち合わせ、ニューズレターの方針について話し合った。

第2回研究会 2002.12.20 13時から16時 (仏文研究室)

出席者 中務哲郎、高橋宏幸、増田真、西村雅樹、松村朋彦、天野恵、マーチン・チェシュコ、川島隆、佐々木茂人、伊藤明子、深尾やよい、池田晋也、山下修一。

下記の研究報告に続いて質疑応答と討論を行った。

[研究報告]

- ・マーチン・チェシュコ：ギリシア喜劇と狂言の比較研究について
- ・増田 真：ルソーの言語論と音楽論における国民性

第3回研究会 2003.2.18 14時より17時 於：東館4階会議室

出席者 中務哲郎、高橋宏幸、天野恵、増田真、西村雅樹、松村朋彦、川上穰、川島隆、佐々木茂人、北岡倅代、野村佳代、真壁靖史、池田晋也。

下記の研究発表に続いて質疑応答と討論を行った。

[研究発表]

- ・川島 隆：カフカの中国・中国人像

- ・天野 恵：ルネサンス期北イタリアの文人とトスカナ語

第4回研究会 2003.5.20 16時半から19時 於：東館4階会議室

出席者：中務哲郎、高橋宏幸、西村雅樹、松村朋彦、田口紀子、
中山和、増田真、川島隆、佐々木茂人、川上穰、林田愛、
平尾浩一、池田晋也。

下記の研究発表に続いて質疑応答と討論を行った。

[研究発表]

- ・川上 穰：『イリアス』における「自己」の意識
- ・田口紀子：「歴史小説」から「小説」へ フランス小説でのウォルター・スコットの役割

第2回研究会の発表要旨

マーチン・チェシュコ：ギリシア喜劇と狂言の比較研究について

In my paper I point at some of the thrills but also problems and dangers of a literary comparison between Japanese comedy and Classical Greek comic genres. Even though the cultural contexts are as different as can be, we find plenty of relevant material that shows how pre-modern societies created opportunities for (semi) dramatic performances.

Spectacle may be seen as an essential element of festivities. Especially religious festivals, rites of passage and harvest celebrations, market days, or fairs - in short, communal events repeated on a regular basis - express their ideology through ritualized performance of all sorts. Such a social context creates a fairly stable framework for the developing dramatic genres. Because of the regularity of such events, the dramatic or semi-dramatic genres performed there must keep an element of conventionality and repetitiveness in order to be instantly recognizable as preserving tradition and securing con-

tinuity. Needless to say, such events also attract various popular artists trying to appeal to the crowds. Though we can identify clearly comic elements in ritualized performances, I show how difficult it is to separate them from the other elements (mock cruelty, superstition, religious awe, contests, etc .) and the context within which they appear.

Literary comedy never abandons this wealth of material from folk culture but reduces its ambiguity and shapes it at will. Comparison of folk motifs and especially the way they were incorporated into literary genres, promises most exciting results if carried out systematically.

I also discuss the spectacle implicit in festive processions and compare the Greek wagons ('hamaxai') and Japanese festival floats turned into a mobile stage on which short sketches are performed ('hikiyama'). I also draw attention to the similarities in primitive comic material connected with regular communal events? namely, disguise tricks performed at a market place (Megarian scheme in Aristophanes' 'Acharnians', and a Kyogen play 'Wakame').

増田 真：ルソーの言語論と音楽論における国民性

ルソーが音楽家として活動し、オペレッタや音楽論を残したことはよく知られているが、その音楽論は彼の言語論や政治思想と密接に結びついており、そこでは国民ごとの個性が重要な役割を果たしている。

言語に関する言及はルソーの初期の作品から見られ、ブフォン論争の最中に書かれた『フランス音楽についての手紙』(1753)においては、イタリア語の音楽性が賞揚されているのに対して、フランス語は抑揚が乏しく音楽には適さない言語と断定されている。その後執筆された『言語起源論』(1760年頃?)では、言語の起源や原初的言語の性質などが想定され、それによれば、原初的な言語は母音や抑揚が豊かで、感情を表現するのに適していた。そのような性質は、明晰性と洗練を兼ね備えた言語として作り上げられた近代フランス語とは反対のものであり、ル

ソーの言語論は当時ヨーロッパの国際語となっていたフランス語に対する批判でもあった。

他方、『言語起源論』において、言語が起源から多様なものだったとされるが、それは自然法学派の「自然の社交性」やそれに結びついた「人類の一般社会」という概念の論駁の一環でもある。また、ルソーが感情を言語と音楽の起源として想定しているのは、肉体的欲求が言語の起源であると主張する百科全書派との論争の帰結であり、道徳的感情を人間の本性とする彼の人間論や政治思想と一致するものである。そのような立場から、言語と音楽はもともと多様なものであるとともに、人間の道徳的感情の表出を起源とするものであり、古代において法が歌われていたのはその証拠とされる。

そしてルソーによれば、音楽による芸術的快楽は感覚によるものではなく、「精神的な作用」によるものであり、言語と同じように、音楽も各国民に固有のものである。言い換えれば、ルソーの言語論と音楽論においては、人間としての普遍性は個別性を通して実現されることになり、ルソーの政治思想において、各国民の個性や愛国心を強める制度や儀式が重視されるのもそのような理由からである。その一例として、ルソーの政治思想の実践的レベルにおいては、祝祭が重視される。彼の推奨する祝祭は、民衆自身が主役と観客を兼ね、国民の一体感と愛国心を強化する役割を負っており、古代における歌われた法と同じように、芸術的快楽と政治的・道徳的義務の融合を体現するものでもある。

このように、ルソーの言語論・音楽論は、フランス音楽批判を出発点としているが、彼の政治思想との合致をめざして練り上げられたもので、彼の文体や芸術論全般とも密接に関連している。さらに、ルソーのこのような側面はフランス革命期の祝祭や弁論術にも影響を与えており、その意味では、ルソーのフランス語批判はフランス語に新たな活力を与えたとも言える。

第3回研究会の発表要旨

川島 隆：カフカの中国・中国人像

19世紀末から20世紀初頭は、ヨーロッパにおいて東洋の文学・思想受容の気運が高まった時期である。かつての儒教にかわって道教（老荘思想）が中国思想の代表と目され、広く支持を受けた。その背景には、時代を覆っていた新ロマン主義的な空気がある。老荘思想は、その文明批判的思潮の受け皿として機能したのである。また、李白・杜甫らの漢詩が翻訳紹介されて詩壇の人気を集め、中国人になりかわって「中国詩」を詠むことが流行したという。

ハンス・ハイルマン編訳の中国詩アンソロジー（1905）などを通じて中国文学に親しんでいたカフカは、自ら数回にわたって中国人の像を描いた。初期の断片『ある戦いの記録』初稿に見られる、（ハイルマンが紹介する李「太白」をモデルにしたとされる）コミカルな「太った男」が、その最も早い例である。後のフェリーツェ・パウアーとの文通の中で、清代の詩人・袁子才（袁枚）の詩句から得た「中国人学者」のイメージを、カフカは一種の自画像として磨き上げてゆく。すなわち、孤独な営みである文学活動と、他者との共同生活のあいだで揺れる人物像として。そして一度は破綻したフェリーツェとの関係が修復された1916年から翌年にかけて、カフカは精力的に作品を執筆したが、そのころ書かれた掌篇（「八折り版ノートB」収録）に再び「中国人学者」が登場する。ここでカフカは、フェリーツェへの手紙に触発されて生まれた初期代表作『判決』（1912）のパースペクティヴを反転させ、今度は「父親」の側から同じ「父と子の物語」を語ってみせた。その結末では、「息子」の無抵抗主義により、父子の対立が融和へと至るかのようである。

この掌篇と同時期の作『万里の長城建設』の中国像は、時代状況を色濃く反映したものとなっている。中国文化の紹介者としても先駆的業績を残しているマルティン・ブーバーは、「文化シオニズム」の理論的指導者としてカフカの周囲のユダヤ人社会に多大な影響力をふるった。「個人」と「民族」、ひいては全「人類」の統一を謳い、その構成単位となるべき宗教的な共同体を建設することを説いた点が、その民族思想の特徴であった。その際、一個人と民族全体とを仲介する理想的伝達形式

を「莊子」の文学性に見たブーバーの中国思想解釈は、彼の初期神秘思想と民族主義とを接続する役割を果たしている。さらに、「東洋的土壌から引き離された結果『遊牧民』と化した東洋人」としてユダヤ人を位置づけることで、ブーバーは「中国」という伝統的トポスに（ユダヤ人にとっての）新たな含意を付与したのだった。カフカの描いた「長城」の「分割工事」や「遊牧民に対する防衛」、「新しいバベルの塔」などのモチーフは、このブーバーの民族思想を形象化して批判的応答を形作るものである。

西洋人として「中国人になる」ことの困難を述べたヘルマン・ヘッセとは対照的に、カフカは自ら「中国人」と名乗っている。その感情移入は、ベンヤミンやカネッティをして「カフカの中国性」を論じさせた。しかし、カフカの慎重な態度が、同時代人の熱狂とは著しく隔たっている事実を見逃してはならない。カフカが短篇『十一人の息子』（1917）で描いた「老子」の戯画は、以上で概観したような中国・中国人への関心を自己総括したものである。同時にその言葉は、文化的他者を前にして、人種的偏見にも、その裏返しである理想化にも埋没しない中立を貫いた例として評価されるだろう。

天野 恵：ルネサンス期北イタリアの文人とトスカナ語

イタリア半島において日常語まで含めた総合的な言語統一のプロセスが始まるのは19世紀の国家統一を待ってのことであるが、文学語に関してはそれよりもはるか以前、すでに16世紀前半の段階でトスカナ語による統一、しかも同時代のトスカナ語ではなく14世紀の、いわゆる黄金期のトスカナ語による統一が達成されていた。言うまでもなく、この「グローバル化」現象は政治的・軍事的な統一を背景としたものではなく、ほぼ純粋に文化的な要因によるものである。

決定的な役割を果たしたのは1525年に出版されたピエトロ・ベンボの『俗語散文論』*Prose della volgar lingua*であったとされる。しかし、実際にはベンボはこれよりもずっと早い1501年、アルドゥス書店からペトラルカの俗語作品集の校訂版を出した時点において、すでに俗語に関する自らの理念を確立していたものと推定される。ペトラルカの自筆手稿

と信じていた写本(現Vaticano Latino 3195)を参照することができたにもかかわらず、そのディプロマティック・エディションを作ろうとはしなかったからである。これに関してとかくの議論のあったことは、羊皮紙版の奥付に残された訂正の痕や、エディションの末尾に付加された fascicolo Bと通称される分冊の存在から窺い知ることが可能であるが、ベンボはその理念をいささかも変えることなく24年後の『俗語散文論』第3巻58章においては、「前置詞in+定冠詞」をすべてne lo, ne la, ne l' といった結合形にするべきであり、ペトラルカもこの規範を守っている旨の主張を展開する。実際には、彼自身の校訂したアルドゥス版ペトラルカにもこの規範に従っていない箇所があったのであるが、彼は1538年の『俗語散文論』第二版において、ついにペトラルカ作品をよりいっそうペトラルカ風にするためと称して、事実上、ペトラルカ自身の詩句にさえも変更を加えることを提案するにいたる。

こうした、いわば強硬なアルカイズム路線が、カスティリオーネやアリオストなど北イタリアの文人たちが発表しつつあった当時のベストセラーにおいてどのように受け入れられ、あるいは拒絶されていったのかを具体的に検証するのが本研究の目的である。調査対象となるテキストとしては、とりあえず『狂えるオランダ』の1516年版、21年版、そして32年版、さらに同作品の32年版における付加部分について現存するアリオストの自筆ノートを、また、パラメーターとしては上記の「前置詞in+定冠詞」をすべて結合形にするという規範を取り上げた。これは、韻文の場合、問題の規範を守るための詩句の変更がほとんど常に音節数の変化をもたらし、そうなると該当部分を含む詩行全体を見直す必要が生じるという事実に着目してのことである。つまり、15世紀中の諸作品をはじめとする、誰がいつ、どのような手を加えたのかを完全に突き止めることが困難なテキストの場合にも、二重子音の扱いや、口蓋音と歯擦音の混同による接続法半過去の活用の誤りといった当時の北イタリアの文人によく見られる他のパラメーターに比して、いわば「外乱」の影響を極度に受けにくいパラメーターであると考えられるからである。

現段階における予備的な調査結果からは、『狂えるオランダ』の1516年版および21年版にあっては、問題の規範から逸脱する選択の行なわれていたケースが40%程度であり、1528頃と推定される自筆ノートにおいても、創作の初期段階を見る限りこの値はまったく低下の兆候を示

しておらず、むしろ45%程度に上昇していたらしいことが垣間見えてくる。こうした値は、例えば15世紀のトスカナ詩人による同タイプの八行詩節を採った作品は言うに及ばず、ボイアルド作品などと比べてもかなりの高率である。それが32年版の印刷までにゼロになっているのであるから、少なくともこのパラメーターに関しては、アリオストがベンボの規範理念を極めて忠実に体現しようと努めたことが看取されると言って差し支えなからう。ちなみに、この28年頃というのは、ちょうどペトルカ作品とベンボの主張する規範との食い違いが議論になっていたと推測される、まさにその時期である。

第4回研究会の発表要旨

川上 穰：『イリアス』における「自己」の意識

古代ギリシアの叙事詩『イリアス』、『オデュッセイア』の詩人として知られるホメロスについてこれまで多くの議論が為されてきたが、詩人の世界観、特に、その人間観をめぐって、人間に自由意志は存在するのか、選択は可能なのかという議論は注目に値する。

Snellは、psyche, thymos, noosと語彙の分析により、各々それ自体の機能を持つ別々の器官であり、統一的なまとまりを持った精神を表わす言葉は存在せず、それ故、ホメロスの人間は決断できなかったと結論づけた。また、これに関連して「二重の動機」(人間と神の意志が人間のある行動に同時に働いている状態)の問題もある。だが、それでは人間は神に操られる道具にすぎなくなる。LeskyやDoddsのように、行動の分析により、人間になんらかの決定、判断の能力があること、「自己」とみなし得る意志が存在すること、自分自身で判断して決定する能力を認めるべきである。

選択の問題に関して、第9歌でアキレウスは、帰国の選択の余地を語るが、第15歌で、ゼウスは、アキレウスを出陣させることになっていると語る。最も力が強いゼウスが意図しているのだから、もはやアキレウスの出陣は変わり得ない。つまり、既にこの段階では帰国の選択の余地は残されていない。

だが、彼にはもう一つの選択の余地があったと私は考える。ゼウスがテティスを通じヘクトルの遺体の返還をアキレウスに要請したとき、それに即答したことにより、栄誉ある生を示しえたことである。もし、神などの力に促されて多額の身代金を得た上で返すことを決定していたのであれば、誰にでも可能な技を当然になしたにすぎなかったであろう。事実、そのような例はよく見出される。しかし、彼は、自ら進んで遺体を返すことを選択し、それにより武勇では得られなかった栄光を得、己の死を気高きものへと高めることになるのである。すなわち、自分の死を、ひいては生を気高く、より栄誉あるものとするのが選択の余地として残されていたといえる。

ホメロスの神の問題をめぐる議論において、神が正義であるというキリスト教的道徳観を前提にしてきた。従来の研究はキリスト教圏において行われてきたため、この点について問題とされることはあまりなかった。しかしながら、ホメロス世界における神はキリスト教の神観では捉えきれない。ホメロスの神観を考えるには、キリスト教的価値観にとらわれず、テキストにあらわれた神や人間の行動やあり方を見直すことによりその行動原理について再検討する必要がある。

強大な神が運命によって人間の生死を決定する状況の中で、人が自分の意志で道を切り広こうとする世界をホメロスは描いた。その世界観が、後世の作品にどのように影響を及ぼしているかをこれから探求していく。

田口紀子：「歴史小説」から「小説」へ フランス小説史でのウォルター・スコットの役割

フランス文学では小説というジャンルが盛んになるのは18世紀になってからであるが、当時の小説はほとんどが1人称形式で書かれた。書簡体、回想録形式、告白体など趣向は様々だが、「私」のディスクールという形式が、物語を信憑性のあるものとして提示するために必要だと感じられたものと考えられる。

「前ロマン派」と呼ばれる、シャトーブリアン、セナンクール、コンスタンたちも、19世紀初頭にその小説を1人称で書いている。それが、

バルザックやスタンダールによる3人称テキストへと移行するのは1830年代のことである。そしてこの移行期に当たる1820年代に盛んに書かれたのが、いわゆる「歴史小説」である。

その火付け役になったのは、1820年から翻訳され始め、フランスでベストセラーになった、ウォルター・スコットの一連の歴史小説である。地理的・歴史的に遠い世界を舞台にし、地方色にあふれた詳細な風景・風俗描写と、会話中心の場면을短い語りでつなぐドラマチックな構成をその特徴としたスコットの作品は、多くのフランスの読者を引きつけ、フランスの作家たちもこぞって「歴史小説」を発表した。そのなかでも代表的な、ヴィニーの『サン＝マール またはルイ13世治世下の陰謀』(1826)、メリメの『1572年 シャルル9世年代記』(1829)、バルザックの『フクロウ党员 または1799年のプルターニユ』(1829)を検討すると、次のような共通した特徴を見いだすことができる。

- ・ 作品が細かく章わけされ、各章にその内容を隠喩的に示すタイトルがつけられ、また内容的に関連した文学テキストからの引用がエピソードとして添えられている。
- ・ 「語り手」の「いま」あるいは「ここ」から物語が語り起こされる。
- ・ 「語り手」が読者に呼びかける。
- ・ 直接話法による具体的(歴史的)場面の再現
- ・ 歴史上の人物と架空の人物との混在

これらは「解釈行為」あるいは「説明行為」としてのテキストの性格を示すのもで、「歴史」の中に「現在」を読み解く鍵を見いだそうとする態度の現れであると考えられる。

じつは1830年前後から書かれ始めたスタンダールの3人称小説も、『アルマンス 1827年のパリのサロンでの情景』(1828)、『赤と黒 1830年年代記』(1830)、『イタリア年代記』(1837-39)のタイトルから伺えるように同時代史として書かれたものである。そしてバルザックの「人間喜劇」の諸作品も、いずれも冒頭で具体的年代(それも発表された時点から遠くない時点)が設定され、その時点から物語が語り起こされ、物語が「現在」に追いついて話が終わっている。「現在」の諸相を「歴史的」に跡づけるのが、バルザックのねらいであった。実際彼はその「人間喜劇への序文」でスコットに言及し、自分はスコットが行った

ことをさらに体系的に行うつもりであると述べている。

つまり彼らの3人称小説は、「同時代史」として書かれた「歴史小説」だと考えることができる。そのために個人的体験だけを語る私的なディスクールに代わって、史実を客観的に「解釈」「解説」する3人称の語り手、これから起こる事件をすでに知り、人物たちの運命を握っている特権的な「語り手」によるディスクールが登場したのである。

バルザックやスタンダールも含めた「リアリズム」作家たちに共通したテーマ系として、ジャン・デュボアは現実感、社会性、全体性、細部へのこだわり、必然性への指向などをあげているが、これらはじつは歴史叙述一般に共通したテーマである。フィクションの言語に特徴的な、全知・遍在の「語り手」による登場人物の内面描写、物語の因果関係の説明、予言的語りなどは、「過去」に対して現在の歴史家が持つ特権的立場とパラレルに考えることができるのではないだろうか。

研究テーマ紹介

中務哲郎：世界をグローバルに見た最初の歴史家ヘロドトス

ペルシア戦争（492-480B.C.）という未曾有の国難をくぐり抜けたギリシアは、やがて政治・経済・文化面で黄金時代を迎えるが、この時代には宗教・言語・文化を共有するものとしてのギリシア人の一体感が高揚し、非ギリシア人をバルバロイとして蔑視する傾向が生じた。その一方では、ギリシア語をマスターしギリシア的教養を身につける者はギリシア人と見なすような立場もあった。いずれにせよ、この時代のギリシア人は一種の「中華思想」を抱いていたわけである。その時代にあってヘロドトスは、広く世界を旅し、ギリシアよりも勝れたものが世界各地にあることを認め、ギリシアを中心としない歴史を書いた。世界を相対的に見るヘロドトスの視点は国と国や人と人の関係のみならず、動物界や自然環境全般にまで及んでいる。このようなヘロドトスの見方がどのようにして形成されたかを同時代の文学・思想の中から明らかにし、彼の思想の今日的意義を考察する。

高橋宏幸：ローマにおける「世界」観

urbi et orbiという言葉は「ローマ内外の信徒に」という意味で少なくともキリスト教文化の「いたるところ、誰もが知る」ものとして使われているが、「都」urbsと「世界」orbisとの語呂合わせはすでにキケローに現れ、ローマ共和政末期から帝政初期の文学において頻繁に用いられる。キケローがローマの掌握した覇権を世界のごく小さな部分として認識していた一方で、オウィディウスは「都」と「世界」の広がりを同一であるとまで表現した。「共和国」の崩壊から「ローマの平和」へという変転の中でローマ人にとって「世界」はどのように変わったのか、そして、それはどのように表現されたか、文献にもとづいて考察する。

齊藤泰弘：ルネサンスの新たな世界観の誕生とその汎ヨーロッパ化の過程の研究

ルネサンスの新たな世俗的世界観は、どのような普遍的価値を持っており、それはどのようにして中世の神の世界観の中から誕生し、絶えずそれと対立しながら、どのようにして近代ヨーロッパの世俗的価値観の共通基盤となるに至ったのかを、マキアヴェッリからガリレオまでの著作を通じて解明する。

ルネサンスの世俗的な世界観や近代的人間観をヨーロッパ世界に広めるのに大きな推進力となったのは、とりわけ科学者や技術者や医学者などの近代科学の担い手たちである。彼らの多くは、きわめて現世的で、経験主義的で、うっすらと唯物論的な考え方を抱いており、人間自身と人間を取巻く世界を現世的原因のみによって説明し、獲得された新知識は現世の万人が共有し、その恩恵も共有すべきだという、きわめてデモクラティックな考えを持っていた。彼ら科学者が、この時代の新たな人文学や世界観の形成に果たした役割についても、詳細に跡付けてみたい。

天野 恵：トスカナ語によるイタリア文章語の統一過程

政治力や軍勢力を背景とする大小の「グローバル化」現象は歴史的にも地理的にも決して珍しいものではないが、イタリア文学語、そしてひいては今日のイタリア語一般にまで及んでいるトスカナ語による統一はそうした性格のものではなかった。16世紀初頭、活版印刷術の普及とと

もに顕在化したイタリアの言語問題をリードしていったのは、理論においても実践においても、ベンボやカスティリオーネ、アリオストといった北イタリアを代表する文人たちだったのである。特に『狂えるオルランド』や『宮廷人』といった当時の俗語によるベストセラーがいずれもベンボの「トスカナ語アルカイズム」に沿った推敲・改訂を施されて完成へと導かれたことは決定的な意味を持っていた。

本質的にフィロロジストであったベンボの主張が、天性の詩人であったアリオストによってどのように吸収、消化されていったのかを、『狂えるオルランド』の3つの版の比較検討により跡づけ、典型的な文化主導のグローバル化の実相を文学作品の内側からミクロ的に検証する。

田口紀子：フランス小説に見る「歴史」の虚構化と「自己」意識

「自己」のイメージは、共時的な「他者」に対立するものとして把握されると同時に、通時的な「他者」つまり「過去の自分」の必然的帰結としても了解されうるものである。フランス19世紀前半の歴史小説の流行期における、歴史叙述のディスクールと小説のディスクールの相互干渉の問題を例にとり、「過去」の「歴史」化、「歴史」の虚構化を通してフランスの自己イメージが形成される過程を検証する。

増田 真：フランスにおける文学論と国民観-18世紀を中心に

近代フランスの文学観の成立過程において、国民観や文化的アイデンティティーの問題がいかに作用したかを検討する。フランス文学史の上では、17世紀の古典主義から19世紀のロマン主義へと移行する過程で、美的快楽の相対性をより重視する思想へと移っていったことはよく知られている。17世紀末の新旧論争から19世紀初めのスタール夫人まで文学や言語と風土や国民性についての議論の系譜が見られる。他方、16世紀から18世紀は近代フランス語がヨーロッパにおける国際語として普及していく時代でもあり、さまざまな言語論を通じて、言語の多様性についての議論が盛んになり、語源学や比較言語学の源流が形成される。このような潮流の中で、フランスの近代的な文学観と国民的アイデンティティーの形成を詳細にあとづけてみるとともに、歴史観や異文化のイメージにも言及したい。

西村雅樹：世紀末ウィーンにおける異文化受容

19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀末ウィーン文化を研究するにあたっては、異文化との関わりが重要なテーマとなる。パールやホーフマンスタール等「若きウィーン派」の文学者たちの中には、日本への関心を示した人々がいた。その関心は、西洋の理性中心主義への批判という問題意識に発するものであった。この問題意識は言語への懐疑と批判として展開され、同時代に東洋思想への傾斜を示したオーストリア人マウトナーの論ともつながりを持つ。また世紀末ウィーンにあって主要な役割を果たしたユダヤ系知識人においては、キリスト教を精神的支柱とする西欧文明に同化するにあたって葛藤が見られた。シュニッツラーには、この点を扱った問題作が見られる。ユダヤ系知識人が抱えていた西欧文明受容というこの問題は、近代西洋精神への問い直しという問題として、前述のウィーンの作家たちの東洋への関心とも重なるものと言える。当研究会では、これらの問題について探究したい。

松村朋彦：近代ドイツ文学における非ヨーロッパ世界の表象

18世紀後半以降、急速な近代化をとげるドイツでは、ヨーロッパ世界の外部に対する関心もまた拡大してゆく。それは、他者を自己のうちに統合しようという意志のあらわれであると同時に、他者の立場に立つことによって自己を相対化しようとする試みでもあった。とりわけヨーロッパ世界の周縁に位置していたドイツでは、こうした視点の二重性が強く意識されざるをえなかったように思われる。こうした問題が、同時代の文学のなかにどのようにあらわれているかを、次のようなテーマにそくして考察してみたい。

(1) 18・19世紀ドイツの世界探検家たちと文学ジャンルとしての旅行記
 (2) 近代ドイツ文学における南北アメリカ像
 (3) 近代ドイツ文学とオリエンタリズム

小川正廣：古代ギリシア・ローマのグローバル化時代における自己と他者

アレクサンダー以降、地中海周辺の範囲内において現代の「グローバル化」に類似した現象が進行した。このヘレニズムからローマ時代に、「自民族と異民族」「自由人と非自由人」「主人と奴隷」「男と女」などの二項対立的な人間・社会・国際関係がどのように変化したのかを、古典

作品を通じて探る。

川上 穰：ホメロスの世界観とその後世への影響

現存する西洋文学史上最古の叙事詩「イリアス」「オデュッセイア」における英雄の生死観、運命観は、古代における人々の規範であり、またそのモチーフは後代の多くの文学作品に影響を与えた。本研究では、様々な作品に現れたホメロスの影響を探りつつ、特にその世界観に注目しながらホメロスの「世界化」がどのようになされていったかを明らかにすることを試みる。

マーチン・チェシュコ：文学的喜劇への歩み

グローバル化というのは、ただ均一性の文化の普及を意味するわけではありません。むしろ、その著しい役割は、世界中の様々な地域文化の比較が始めて可能となり、自分の文化を広げたコンテキストの中で、観察できるようになることにあるのではないのでしょうか。近代以前の民衆芸術は、どこの国でも、共同生活の定期的な活動の共通点のため、多少類似したターゲットやパターンが見られるとも言えます。農産業や、宗教上の礼拝、通過儀礼 (rites of passage) はあらゆるコミュニティーの焦点とされ、民俗芸能の対象ともされていました。突き止めにくい事情ながら、文学的なジャンルに取り入れられたことにより、現在でも、元の形が想像できるわけです。ある文化の中で、こういった素材が、社会背景や文学習慣など、様々な要素によって、文学的に発展していったわけです。民俗芸能と深いつながりがあるといえる喜劇は、いくら異なった文化のものでも、似ているモチーフが見られるので、民俗芸能の名残や、ルールに従った文学作品への展開を分析することができるわけです。発表の際、ギリシャ喜劇と日本の狂言の具体的な例を挙げて、民俗芸能と文学的習慣に従った作品との関係を観察したいと思います。

佐々木茂人：ディアスポラにおけるユダヤ人社会と文化

ディアスポラ（離散）したユダヤ人が、居住している社会とその文化への関わりの中で生み出した文化、そしてその諸問題を、文学作品、批評、演劇などさまざまな言説を手がかりにして分析し、現在新たな観点から用いられている「ディアスポラ」を再考する。ユダヤ人の歴史は離

散の繰り返しであった。しかし、苦難の状況にあって彼らは独自の文化を生み出した。移民など人の移動がグローバル化した今日、ユダヤ人の足跡を追い、彼らはどのようにして文化の問題と向き合ったのか考えてみることは、極めてアクチュアルな視点となる。研究では対象地域をヨーロッパ、とりわけドイツ語圏を中心とし、時期を前世紀転換期とする。この時期には解放（同権の獲得）から民族主義の高まり、止むことのない迫害と、ユダヤ人は居住する社会・文化とのそれまでの関係に注意を払わざるをえなかった。この状況下で彼らがどのように文化を捉え、またそれはどのような意義をもつのか考察する。

川島 隆：ドイツ文学におけるオリエント像

ドイツ文学に表れたオリエンタリズムの内実を、その対象の多層性、およびその主体の多層性の両面から精緻化することを目指す。ドイツは「西」と「東」の中間に位置している。ただし、それは「中庸」における安定を意味しない。ヘルダーを始めとする近代ドイツの思想家たちは、東洋を複数の「発展段階」によって分節化して捉えた。そのことはドイツにおける民族アイデンティティーの形成に重要な役割を果たしている。そして同時に彼らは、フランスに代表される「西洋文明」の辺縁に立つものとして自文化を位置づけてきた。したがって、近代ドイツにおけるオリエンタリズムの主体は決して一枚岩ではなく、自らをもその対象に含み込む複数の視線の介在によって幾重にも分裂していたと言える。このような多層性の反映と展開を、主に18/19世紀転換期から19/20世紀転換期までのドイツ文学に読み込んでいきたい。

エンゲルベルト・ヨリッセン：近現代のヨーロッパ人による植民地政策の問題をめぐって

ヨーロッパの15・16世紀は思想、芸術、文学などの分野が大いに盛えたルネッサンス時代としても知られている。が、この同時代はヨーロッパにおける軍事上、宗教的などの紛争の時代でもあり、ヨーロッパ人による刺激的な領土拡張とそれに伴う植民地政策のはじまりの時代でもあった。現代の世界における経済、政治、文化などに関わる多くの国際的問題は当時に起源をもつ。そこで、とりわけイタリアとポルトガルにおける歴史、文化史を背景として、主にポルトガルによる植民地政策に関

する問題について総合的に現代まで考察したい。ブラジルは19世紀初期に独立したが、ポルトガルはインド、アフリカにおける植民地およびチモール、マカオを二十世紀の後半まで支配した。具体的にポルトガルが要求した旧植民地における独立までの問題と独立後の過程を伴う政治的、文化的(言語、宗教など)のアイデンティティの問題について考察したい。それらの問題をインドにおけるイギリスによる植民地政策に関わる問題と比較して考えたい。それを一方で、英語で執筆するインド出身の作家の作品を通して考察し、他方で、インド西南の海岸に面している現代のケーララ州におけるヨーロッパ人による植民地政策を通して考察してみたい。

今後の活動

第5回研究会

7月25日(金)15時から17時 於:東館4階会議室

報告者

佐々木茂人:ディアスポラと文化の変容 - J. ゴルディンの『神と人間と悪魔』 -

高橋宏幸:ローマの境界と世界

COE34研究会国際セミナー

11月20日(木)午後3時から5時 於:京大会館102号室

講演

エンゲルベルト・ヨリッセン:植民地政策と言語 インド英文学の問題をめぐって(日本語)

E. M. Craik: The knife and the fire: medical practice of east and west.

各研究室の2003年度活動計画

<西洋古典語学西洋古典文学専修>

平成14年度は、準備不足の中で出発した感があるが、今年度は、学外からの参加者が次第に増えてきたので、学内外の共同研究を進めていく素地が出来た。

主な活動としては、11月頃に国際セミナーを予定しており、E.M.クレイク元教授を招待することが決定している。もう一人の招待者については、現在交渉中である。

<イタリア語学イタリア文学専修>

齊藤は、COEプログラム海外拠点の形成と「文学と言語を通して見たグローバル化の歴史」に関する資料収集のため、7月から12月にわたって渡欧し、ヴェネツィアを本拠地としてルネサンス以降の科学者・医学者の著作に依拠しつつ近代的世界観の拡散の様子を研究する。また、天野は、ベンボの理論の確立と流布を跡づける研究を続行するが、その対象をこれまでのアリオスト作品のみならずカスティリオーネや、とりわけベンボ自身の初期作品へも広げる予定。

<フランス語学フランス文学専修>

当専修では、今年度は7月から9月の3ヶ月間、ピエール＝エドモン・ロベール氏（パリ第3大学教授）を客員教授としてお迎えするほか、10月にはマルク・フュマロリ氏（元コレージュ・ド・フランス教授、アカデミー・フランセーズ会員）を日本学術振興会の「著名学者招聘計画」にもとづきお招きする予定である。フュマロリ氏は17世紀フランス文学の権威であるだけでなく、レトリックやフランス語史の専門家としても知られ、国家と文化政策に関する著作もあり、本研究計画を遂行する上で有益な見識をもたらしてくれることが期待される。

<ドイツ語学ドイツ文学専修>

ドイツ語学ドイツ文学専修では、ドイツ文学を通して見たグローバル化の歴史につき、今年度は各研究員が以下のような研究を進める。西村は、若きウィーン派の文学者たちの日本への関心を言語批判の問題と関

わらせて、松村は、ゲーテ時代のドイツ文学に見られる異文化の表象について、佐々木は、ドイツ語圏の文学におけるディアスポラの表象について、川島は、カフカの同時代人の間での「黄禍」をめぐる議論とユダヤ人問題との重なりについて研究する予定である。